

今ある音をみつけ新しい音風景をつくろう：授業の趣旨

弘前大学教育学部教授 今田匡彦

ヒトがオンガクという営みを実践する以前から、世界はさまざまな音と沈黙で成り立っていました。それらの音風景と、聴覚を含むヒトの身体が触れ合ったとき、オンガクとコトバの奇蹟が誕生した、とカナダの作曲家 R. マリー・シェーファー (1933-2021) は考えました。しかし、視覚的空間を名指す風景というコトバが古くから存在したのに対し、聴覚を中心とした全体感覚を示すためのコトバは、20 世紀になっても皆無だったのです。そこでシェーファーは景観を示す英語 landscape の接尾語 scape を sound に付け、サウンドスケープという新しいコトバ、そして概念を提唱したのです。今回の授業タイトルにある〈新しい音風景〉は、シェーファーによるサウンドスケープを基盤としています。今あるさまざまな音に子どもたちが着目することで生成される新しい音風景が、すなわち子どもたちによる新しいオンガクの創生に繋がります。

さて、17 のゴールから構成される SDGs (Sustainable Development Goals) が 2015 年に国連サミットで採択された際の最も重要な提言の一つが “No one will be left behind” (誰も取り残さない) です。この提言が今回の授業のもう一つの基盤となります。音楽とは本来、自然のサウンドスケープと人間の身体と情動との往還によって、魔術的に生まれたものである、と考えるシェーファー (若尾, 1990 p. 23) は、以下のように述べます。

西洋の音楽教育でよくあることなのですが、子供たちが、例えば六歳くらいでみんなピアノを始めるとします。それで一〇歳になれば半分はやめていて、一五歳では一〇%くらいがまだ続けていて、二〇歳ではたったの1%です。つまり、この場合教師が望んでいるのは真の音楽教育ではなく、次のグレン・グールドのためのものなのです。それで先生は (すました声で) 「私はあの偉大なピアニストの教師でした」と言えるわけ。それでレッスン料を高く取ったりする。でもこれでは一部以外の人にはなんにもなりませんよね。私にとって、これは悪い種類の音楽教育で、音楽教育とは万人のためのものでなくてはなりません。

《ゴールドベルク変奏曲》を演奏する第2のグールドを養成することは、既にあるものの保存を目的とする Conservatory や Academy にとっては重要な使命です。しかし、これらの伝統が、誰も取り残さない、のではなく、天才しか残さない、というマナーを基調とすることは、衆目の一致するところでもあります。現在私たちが考える音楽、たとえば Jpop や Kpop、クラシックやジャズは魅力的な商品として市場経済のなかで消費されます。そのため学校で音楽を学ばなくても、子どもたちは好きなミュージシャンができ、学校で「歌唱指導」を受けなくても、恐らくカラオケで上手に歌うことができます。グールドのように、ピアニス

トになることを決意した子どもの家には、恐らくピアノがあつて、レッスンを始め、吹奏楽や合唱に興味を持った子たちは、部活に参加します。これらの「音楽」は確かに音楽の一部ですが、その総体では勿論ありません。つまり、シェーファーが考える、子どもたちが自らの創造性と協働によって今まで聞いたことのない音の世界を創り出す、といった万人のための音楽教育とは少し異なるのです。このような今日の音楽教育の諸問題について、シェーファー（2005 p.10）は以下のように指摘しています。

外国の音楽ばかりに価値を置く。他人が創った音楽に価値を置く。高度な技術を要求するので子どもたちは音楽本来の喜びを忘れる。高価な音楽に価値を置き、安価な素材は無視される。教師も親もコンサート以外の音楽を理解できない。音楽は科学, 他の芸術, 環境とコンタクトが無く孤立している。教師は娯楽産業に無力である。

国連が SDGs を提唱する以前から、シェーファーは既に〈誰も取り残さない〉ためのオンガクの創生を子どもたちに委ねていました。特別支援学校, 小学校, 中学校の子どもたちの協働による今回の授業は, そのための小さな一歩, ということになります。

References:

- 若尾裕. (1990). 『モア・ザン・ミュージック』. (東京: 勁草書房).
- Schafer, R. M. (2005). *HearSing*. Ontario: Arcana Edition.